

令和 8 年度

宮崎国際大学入学者選抜試験問題

国

語

国際教養学部
教 育 学 部

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子及び解答用紙の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて 30 ページあります。（問題は 2 ページからです。）
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁、解答用紙の汚れなどがあった場合には、直ちに手を上げて監督者に申し出てください。
4. 試験開始後、解答用紙の所定欄に受験番号、氏名をはっきり記入してください。
5. 解答は、問題ごとに、解答用紙の指定された箇所に記入してください。
6. 時間内に解答し終わっても、退出することはできません。
7. 試験中に質問等があるときは、黙って手を上げて監督者を呼んでください。
8. 不正行為に対しては、厳正に対処します。不正行為があった場合は、その時点で受験を中止し、退室してもらいます。また、試験結果を無効にします。
9. 問題冊子は、試験終了後持ち帰ってください。

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

原理的に言って、(a) 単独の人間というのは存在しません。人間は集団生活をしています。どういふことかと言うと、人間は言葉を使うでしょう？ 言葉というのは、周りにそれを使っている人間が大勢いなかったら身につきません。言葉はつねに一人ひとりの人間より先にあったわけです。その言葉と共同性というのは切っても切れない関係があつて、その関係の中でわれわれは一人ひとり人間になってゆく。だから人間というのは基本的に集合的存在であつて、単独の人間というのは想定できません。

だから必ず集団があるわけですが、昔の集団の場合は、洋の東西を問わず、個人の独立といった意識は今ほど重要ではなかったでしょう。とはいってももちろん、体や心は別々で、生きているのは一人ひとりであつて、顔も違えば名前も違う。それぞれ考えることも違う、区別された個人です。そんなふうにならざるを得ないけれども、一人ひとりが当たり前に個でありうるのは平時、普通の、平穏な時です。

A、ひとたび他の部族と戦となると、個は集団の要素になる。何のために戦うかという、自分の属する集団を守るためだからです。その時には、あらゆる個の行動は集団のためのものとして統合される。そうでなければ戦いになりません。平穏な時は一人ひとりの個であるけれども、そうでない時、つまりそれを「非常時」というわけですが、その時には磁力がかかったように人びとはイツ①セイ②に集団に統合されます。

皆が集団として戦います。けれども、その中で人並み外れて優れた働きをすると、そういう者が英雄になる。功労者になる。その英雄が倒れると、集団のために身を犠牲にした、そして自分たちを救ってくれたというので祀^{まつ}られる。それが神と崇められたり、その子が権力者になったりする。そんなふうにして、非常時である戦の時の功績というのは、共同体の中でたいへん重要な意義を与えられます。

それがときに(b) 部族の創設神話の主人公にもなる。われわれの三代前に河向^{へむ}うの大きな部族との戦があつて、その時

われわれの部族はまだ小さかったけれども、あの英雄のお蔭^{かげ}で勝ち、大きく発展して今の繁栄がある、とか。英雄がこの国の基礎を造ったといった、集団ごとの物語があります。そうしてその物語をみんなで共有する。それが仲間意識や部族の誇りを作り、その英雄に続けと言って、次の戦の時にはそれを模範にみんなが戦うことになる。そして、一人ひとりの死は集団の存続のための「犠牲」だとして意味づけられ、そういうかたちで集団が固められてゆきます。

B、まずひとつ言えるのは、平時があつて非常時がある。その「非常時」の特徴は何かというと、個^こに対して、集団^ぐが圧倒的に優位に立つということです。いわば集団が個に勝利するというのが非常時です。一人ひとりの生には意味はない。一人ひとり死んでも、集団が生き延びればよい、ということです。そういう関係は平時には潜在化しますが、平時にも集団を組織する仕組みとしてシン^②トウ^②してはいるでしょう。

非常時には、個を呑み込んで集団全体がいわば励起されるわけです。それが個にも個を超えた力を発揮させる。一人が倒れると、よし、お前の分までと、普段は頼りなくても、このときばかりは^③フン^③キして敵を何人も倒したりと、異様な力を発揮する人がいる。それをあれは人間ではない、人を超えた鬼神だ、血まみれになつて怖い、というので畏れられながらも讃嘆^{さんたん}される。怖いものを崇める、その御利益にあやかるとか、そういう関係もありますね。^④それ^④は崇拜というものひとつの起源でしょう。

勝った方はそうとして、では敗れた方はどうなるか。場所や状況にもよるでしょうが、敗れると、男は奴隸となり、女は戦利品となつて、その分、勝った共同体が豊かになる。そうして勝った側だけの物語が残ることになります。

C、もうひとつ生まれるものがある。それがエレジー（哀歌）ですね。こんなふうに国の人びとは雄々しく戦ったけれども、その甲斐^{かい}もなく、^④コキ^④ヨウは敵に^{（注1）}蹂躪^{じゅうりく}され、父兄弟はみな倒れ、あるいは捕囚となり、喪失や^{（d）}滅亡^④を嘆き悲しむ女たちの哀歌というの残ります。また、そんな哀歌を作ること生き延びることができます。悲しみが内に籠^{こも}ってしまうと気が狂ったり、水に飛び込んだりしてしまうけれども、こういう極限状況では、哀歌を歌うことで人は悲しみに表現を与え、死者たちを記憶し、表現することで生き延びてもゆくのです。悲しみの感情さえ生きる糧になる。

D、戦を見聞した人が出来事を叙事詩に替えたりする。そういうところに文学の起源があります。そう考えるとまさに昔の人（たとえばギリシアの^{（注2）}ヘラクレイトス）が言ったように、戦いは万物の生みの親だったのかもしれない。技術は進歩するし、芸術まで生まれる。そして、それから信仰の形も生まれるのですから。

もうひとつ、「非常時」の特徴は、殺人が解禁されるということです。^{（注3）}前章で少しふれたように、人間はお互い基本的に殺さないということがないで成立しません。だから殺さない。それでも殺人を犯す者がいると共同体がそれを罰します。けれども、戦の時には、人間社会を成り立たせているこの「禁止」というものが、「敵」に向かっては解除されます。むしろ、殺せ、と推奨されさえします。そしてめざましく敵を倒した者が顕彰される。そういう意味では、（戦争では、人は半ば人間ではなくなるわけです。それが「非常時」です。要するに、戦争のもうひとつの性格というのは、「殺人の禁止」が「敵」に向けて解除されるということです。戦争では基本的に何をやるかということ、破壊と人殺しです。それが戦争の原型になっていて、文明の発達に従っていろいろと様相を変えてゆくわけです。

争いというのはたぶん人間社会では避けられないことなのだろうと思います。皆がお互い仲良くしようと思っても、それぞれの共同体の都合とか内部事情とかで、内でも外でも衝突が起こってしまうかもしれない。その結果、現実として戦争は途絶えたことがなかった。そして力の強いところが出てくると、それが広域を支配して帝国と呼ばれるものを作ってゆく。その帝国秩序内では平和ということもあります。一面ではそれはEの全面化だともいえますが。そういうことが世界の各地域で起こってきました。

もしも、圧倒的な権威がどこかにあり、戦や争いをしてはいけなくと強力な力でもって人びとを抑え込めば、戦争は起こらないかもしれない。そういうことを理想として掲げたのは例えばキリスト教でした。世界には創造主がおり、その創造主に万人がひれ伏せばそこは神の国になると。けれども、キリスト教もそれは理想であるということを隠していません。それは「天の国」だからこそ実現出来ることで、「地上の国」は欲望と憎悪が渦巻く争いに満ち、地上には平安はないというのです（事実、キリスト教はそれ自体が最も激しい戦争の原因にもなってきました）。それでもそこに神の一条の光

がさすというのは、平和を求める気持ちがあるということでしょう。とはいえ基本的に人間の^{あや}綾なす集団的な暴力をどうすることもできません。もしかするとその暴力の本質的な部分は、人間のようなものが生きてゆくということと不可分の力なのかもしれません。

要するに一人ひとりが生きる力はそれぞれ働くけれども、一人ひとりとは集団をなして集団の中で生きている。だからその一人ひとりの力というのは集団全体を高めるためにも働くし、集団が争いを起こすためにも働く。そして集団として動く場合には、今度は集団の力として統合されて同じ方向に向かう。だからそれが抑えられることはない。

本来にキリスト教が全世界に広まって、みんながキリスト教徒になって、^⑤敬虔^{けいけん}で理想的なキリスト教徒になるとしたら、そこに天国は実現されるかもしれません。けれども、①その世界はひよつとすると死の国と同じかもしれない。みんなが死んでいるのと同じような状態……。「天国」というのは死後にしか訪れないものだから、キリスト教の理想とはそういう^④パラドクスめいたものなのかもしれません。「全世界が平安になった」ということは、皆死んでしまったというところかもしれない。それは仏教の理想とも似ています。悟りを開くということは人が煩惱から解放されてニルヴァーナ^{（涅槃）}に入ること、釈迦^{しやくか}の入滅というのは死ぬことでしょう。死んだらもうどんな欲望も災いもないからニルヴァーナです。だとしたら、人間の生きる理想の境地というのは「死」なのかもしれないということになってしまう。けれども、死なない限りで、つまりは安らぎから隔たっている限りで、人間は生きているのです。

生きるというのはそういうふう複雑なことのようです。一人ひとり違って、それが大勢集まっているのが人間世界です。それが全部協和するとは限らない。協和するというのは強制か無力化によってしかできなくて、そうなっていくと皆生きていないのと同じことになってしまう。人びとが生きている時の多様性というのは、いろいろな^⑥軋轢^{あつれき}を生みだしたりもする。それをどうやって避け緩和するかということは人間が常々考えてきていることです。

社会の組織化というものもそのことと深く結びついているように思えます。どうやって争いや^⑦サンゲキ、あるいは暴力の爆発を防ぐか、抑制するかということと結びついていると思います。けれども、素朴に考えれば、戦争は避けられないし、

集団間の争いは避けられない。それは暴力の方向づけられた解放として出てくるし、その時に個は意味を持たないし、その混乱はまた結果的にさまざまなものを生み出す増^る埒^ばにもなります。

戦争はそうように、人間社会のリセットと展開の元になってきました。

（西谷 修『戦争とは何だろうか』出題に当たって一部を改変した。）

（注1）蹂躪 ふみにじり侵害すること。

（注2）ヘラクレイトス 古代ギリシアの哲学者（紀元前五四〇年頃～紀元前四八〇年頃）。

（注3）前章で少しふれたように 本文より前に書かれている内容を指す。

（注4）パラドクス 逆説。

問一 傍線部①～④、⑦と同じ漢字を含むものを、それぞれあとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

① イッセイ

ア 開会式で選手センセイを務める。

イ 校歌をセイショウする。

ウ シンセイな儀式が行われる。

エ 文集をセイホンする。

オ 資金の援助をヨウセイする。

② シントウ

ア X線が身体をトウカする。

イ 新機能をトウサイした自動車。

ウ いくつかの山々をトウハする。

エ バイオリンの音色にトウスイする。

オ 道路がトウケツしている。

③ フンキ

- ア 横暴なやり方にフンガイする。
- イ 決算のフンシヨクが指摘される。
- ウ 会議がフンキュウしてまともらない。
- エ ここには五世紀のコフンがある。
- オ フンパツして高価な食材を購入する。

④ コキヨウ

- ア チームの士気をコブする。
- イ ココウの天才を描いた映画。
- ウ 偉人のカイコ録を読む。
- エ 資源がコカツする恐れがある。
- オ コイにコップを落とす。

⑦ サンゲキ

- ア 生徒の行動にサンジを送る。
- イ 各地にリサンした資料を集める。
- ウ 事件現場のサンジョウに言葉を失う。
- エ サンセイの土壌を好む野菜。
- オ ヨウサン業を体験する。

問二 傍線部⑤、⑥の本文中における意味として最も適切なものを、それぞれあとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

⑤ 敬虔

ア つつしみ深く尊ぶ様子

イ 格調高く落ち着いた様子

ウ 安らかで争いのない様子

エ 忠誠的で生真面目な様子

オ 穏やかで誠実な様子

⑥ 軋轢

ア 調和

イ 種類

ウ 変化

エ 無気力

オ 不和

問三 傍線部(a)「単独の人間というのは存在しません」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一

つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰かと結びつくことを前提としている言葉を使うことによって、一人ひとりの人間の自己が確立されるから。
- イ 共同体の成立に重要な役割を果たしている言葉を自然に身につけることで、個が集合的存在に統合されるから。
- ウ 身体は一人ひとりが独立していても、言葉を使うことによって、それぞれの意識をつなげようとしているから。
- エ 一人ひとりの人間は周囲に人間が大勢存在する状態で生まれ、言葉を使うことで初めて周囲と自分を切り離せるから。

問四 本文中の空欄 A ～ D にあてはまる言葉の最も適切な組み合わせを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答え

なさい。

- | | | | | |
|---|--------|--------|--------|---------|
| ア | Aーけれども | Bーそこで | Cーとはいえ | Dー要するに |
| イ | Aーつまり | Bーただ | Cー要するに | Dーさらに |
| ウ | Aーけれども | Bーそこで | Cーただ | Dーまた |
| エ | Aーしかし | Bーけれども | Cーつまり | Dーしたがって |

問五 傍線部(b)「部族の創設神話」とあるが、創設神話にはどのような役割があるか。その説明として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 部族の栄光や成り立ちを記録し共有することで、神や権力に対する認識を統一し、平時でも集団を存続させるための実践的行動を促す役割。

イ 部族に繁栄をもたらした存在の功績を伝承することで、その集団に属する喜びを認識させ、個としての存在意義を自覚させる役割。

ウ 部族の歴史や重要人物を正しく記録して伝えることで、望ましい集団のあり方をそれぞれの合意のもとに行き渡らせ、結束力を高める役割。

エ 部族にとって特別な存在の功績を語り継ぐことで、連帯感や帰属意識を高め、集団であることの必要性を個人の内面に植え付ける役割。

問六 傍線部(c)「それ」とは、どのようなことを指しているか。本文中の言葉を使って、三十五字以上四十五字以内で書きなさい。

問七 傍線部(d)「滅亡」と反対の意味の言葉として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 所産

イ 契機

ウ 盛運

エ 興隆

問八 傍線部(e)「戦争では、人は半ば人間ではなくなるわけです」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦争という非常時においては、人間社会の基礎となっている道徳や倫理が崩壊して、人間が人としての感情を失うようになるため、人道的に命を守られることもなくなるということ。

イ 戦争という非常時においては、人間は人間社会を構築している原則が適用されない存在となり、社会の制約に反することが可能になると同時に制約によって守られることもなくなるということ。

ウ 戦争という非常時においては、敵である人間は人間社会という共同体から排除され、社会を構成している一部として扱われなくなり、ただの物体と同じように破壊の対象になるということ。

エ 戦争という非常時においては、人間は一人の人間として考えや感情を持つことが許可されなくなるとともに、人間を定義づけて人間社会を維持している秩序が積極的に破壊されるということ。

問九 本文中の空欄

E

 にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|-----------------------------------|
| エ | ウ | イ | ア |
| 摩
擦 | 抑
圧 | 防
御 | 瓦 ^が
解 ^{かい} |

問十 傍線部(f)「その世界はひよつとすると死の国と同じかもしれない」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 争いのない世界は、それぞれの人間の個性や複雑な感情とすべての人間が普遍的に持つ平和を望む気持ちの衝突が解決することで実現するため、現実を生きる人間のいないむなし状態になるということ。

イ 争いのない世界は、人びとの欲望や苦しみを権威が強制的に取り除き、それぞれに異なる意識を統一することで実現するため、現実には人間がみな暴力によって生命を落とすような状態であるということ。

ウ 争いのない世界は、すべての人間が他人から解放され人生を理想的に生きるか、大きな力を持つ存在が他人を強制的に従わせるかで実現するため、現実には矛盾に満ちていて存在するはずがないということ。

エ 争いのない世界は、人間が自然に持っている負の感情や人間同士の衝突の原因となる多様性が消失した場合に実現するため、現実には生きる人間の力が働いた複雑で動的な状態ではなくなるということ。

問十一 本文における筆者の主張として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 社会の組織化によって、統制されない個を集団に取りこんでいくことで人間社会はリセットされるが、その組織化から別の争いが発生すると個は意味を持たなくなつて、集団全体が共有する物語や信仰、文化や技術が生まれ、戦争が展開の元になる。

イ 人間は社会を組織化することで混乱を制御しようとするが、暴力性が潜在する集団として動く以上いずれ争いが発生して組織を立て直す必要が生まれ、その混迷が文明や社会の発展につながるため、戦争は社会を一新して展開していく起点であるといえる。

ウ 人間は世界の平安を求めて集団間の争いを回避しようとするが、そうした問題は戦争を通して権力の所在を明確にして社会の組織化を図ることでは解決せず、その混乱の結果として平和が訪れるので、戦争とは人間社会を更新して新たな展開を生み出す始点といえる。

エ 戦争は、集団が統合されたときに人間の暴力性に押し流されて発生し、社会と人間を破壊して一新していくが、人間は本質的に争いを回避して緩和しようとする欲求を持ったため、激しい争いのあとは集団が社会によって組織化され、新たな展開を生み出していく。

二 次の記事は、関口尚の小説「サニー・シックスティーン・ルール」の一節である。会社を辞めた主人公の礼央（「ぼく」）は、聴覚障害のある同世代のカメラマンの美駒ちゃんと出会い、彼女の所属するカメラ愛好家の集まり・チーム300に参加するようになった。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

プリントを焼いていると、^{（注1）} ヒロと入れ替わりで美駒ちゃんが^{（注2）} イチマルサンへやってきた。彼女がやってくると、この暗くて薬品のおに満ちたイチマルサンも、ぱつと明かりが灯ったように感じられるから不思議だ。

美駒ちゃんは挨拶もそこそこにプリント作業に取りかかった。彼女がせっせとプリントを焼くものだから、ぼくも負けずに黙々と作業に^①没頭した。

「そうだ、音楽をかけてもいいよ」と美駒ちゃんが思い出したかのように言う。^{（注3）} ぼくは笑顔で首を振ってノーの意思を示した。「そう？ でも、行き詰まったら遠慮せずにかけてね」

ヒロはいつも音楽を流しながら^{（注4）} 暗室作業をする。ぼくは音楽に^②疎いのでよくわからないのだけれどアメリカのハードロックらしい。ヒロはたとえ美駒ちゃんがいっても大音量で音楽を流す。美駒ちゃんは暗室作業をするときも補聴器を外して、大音量でかけていても聞こえないからだ。

でも、ぼくは音楽をかけないで暗室作業を行おうと心に決めている。そう決めた理由はただひとつ。ぼくも美駒ちゃんと同じように、音のない世界で写真を焼きたかったからだ。彼女と同じように視覚の世界にだけ向き合いたかった。

ぼくと美駒ちゃんは会話も交わさず、無言で写真を焼き続けた。写真を始めて三ヶ月が経ち、だいぶスムーズに暗室作業を行えるようになってきた。現像液の入ったバットに印画紙を浸すと、羽村動物園で撮ったコンゴウインコの像が浮かび上がってくる。コンゴウインコはインコという名前であるけれどオウムかと思うほど大きい。インコ科で最大だそうで体重も一キロあるのだとか。

でき上がったプリントを持って居間へ移動し、^{（注4）} 露光時間が適切だったか、プリントが硬調か軟調かを確認する。

ぼくが撮ったコンゴウインコは、赤い羽根が印象的なベニコンゴウインコと呼ばれるものだった。頭から背中と翼の途中までが鮮やかな赤で彩られていた。

翼を染める赤は途中で濃い緑へと急に変わり、次に南国の海を思わせる美しい水色へと変わる。先端は濃い青だ。翼だけでも四色の变化がある。目の周辺は白。嘴も白い。コンゴウインコはA色合いをしていて、カラーフィルムで撮影したら映える鳥に違いない。

だが、ぼくが使用したのはモノクロフィルムだ。色が無い。インコ自身も誇らしく思っているだろう鮮やかな色合いを、ごっそり奪ったようになっていく。

ただ、色がなくなったことで見えてくるものもある。翼の作りの繊細さや、羽根や嘴の光沢などだ。インコが賢者のような顔つきをしていることにも気づく。これらはみんなインコを彩る鮮やかな色合いに目を奪われて気づけなかったことだった。

つまるところ、色は強い。印象においても、視覚情報においても。

ぼくがインコの色鮮やかさに引っぱられてシャッターを切っていたことにも気づく。色の強さが面白くて撮っていたのだ。しかし、インコの赤も緑も青も、モノクロのプリントではみんなグレーに置き換わっていた。さらにインコの背後に広がっていた緑の木々も同じようなグレーになっていた。^(注5) ファインダーを覗いたときに見えていたのは、緑の木々を背景とした色鮮やかなインコの姿。緑と赤の^③コントラストが強烈で視覚的に強く思えた。ところが、モノクロ写真になって色がなくなってみると、色による視覚的な強さは失われてしまった。グレーの背景にグレーのインコという凡庸な写真となった。

「難しいなあ」

落胆して天井を見上げる。悔しくもある。なぜ撮影時にモノクロになったでき上がりの状態を想像して撮らなかったのだろう。フィルムカメラはデジタルカメラのように撮った画像を逐一ディスプレイで確認できない。どのように撮れているかは現像してプリントしてみないとわからないのだ。

④プリントの反省をしていると美駒ちゃんが暗室から出てきた。ぼくのプリントへ目をやって微笑^{ほほえ}む。

「このあいだのインコちゃんだね」

ぼくはホワイトボードに向かい、マーカーペンを走らせた。

《難しいね》

「どこらへんが」

《このインコは赤や緑や青とカラフルだったから強い被写体に思えて撮ったけど、モノクロになるとそうでもなくて》

「それ、よくあることなんだよねえ」

《色のないモノクロの状態を想像して撮らなきゃいけないってことなんだね》

美駒ちゃんがホワイトボードに向かう。赤いペンを取り、いまぼくが書いた一文に花マルをつけた。

「撮ったら必ずプリントすることが大切だよ。フィルムの場合、撮影が成功か失敗かはプリントしないとわからないからね。失敗だったらその教訓を次の撮影に生かせばいいわけだし。結局、プリントしないと教訓だって得られないからね」

ぼくにはプリントの成功も失敗もその両方の経験が少ない。圧倒的に蓄積が足りないのだ。途方に暮れそうになる。しかも写真**は**ぼくが幼いころから両親に教えこまれてきたこととまったく逆の分野と気づいた。そのことを美駒ちゃんに伝えてみる。

《写真はぼくが幼いころから教えこまれたことと、まったく逆で戸惑うことが多いんだよね》

「逆というのは」

美駒ちゃんが不思議そうに首を傾げた。ぼくは先ほどの文字を消し、ぼくは再びマーカーペンを走らせる。

《幼いころからぼくは両親から文章で世界を再現できるようになれって教えこまれたんだ》

「世界を再現？」

《ぼくの家では世界は言葉でできているって教わるんだよ。この世界のすべては言葉によって名が与えられることで初めて存在するって。まず言葉ありき。言葉をたくさん覚えれば白い紙に世界を再現できるはずだって》

「言葉ありき」

ホワイトボードのぼくの文字を見つめて。(美駒ちゃんはずぶやいた。ぼくはさらに書き足す。

へでも、写真はまったくの逆だね。以前のぼくは出会ったものすべてを言葉にして、これがぼくの出会った世界なんですって言葉でもって紙の上に再現してた。けれど、写真は逆。出会ったものを言葉にせず、白い印画紙の上に像のままプリントで再現する。言葉は介在しないでいいんだ」

ホワイトボードに書いたことが妥当かどうか、心配で美駒ちゃんを④窺う。トンチンカンなことを言っていないだろうか。読み終えた美駒ちゃんがぼくに向き直った。うんうんとうなずいてくれた。Bことは言っていないようだ。ぼくは気をよくしてさらに続けて書いた。

へたぶんだけど、写真は言葉が介在しないほうがいいみたいだね。言葉にならないものを言葉にしないまま成り立たせたほうがいい。視覚刺激をそのまま写真にしたほうがいい。結局、言葉って意味だから、写真は言葉から離れたほうがいいのかもしれない。言葉から離れ、意味から離れ、それでも視覚として存在する面白さが写真なんじゃないかな」

文章と写真。表現としてどちらが優位かという比較は意味がない。世界との向き合い方の違いなんだろう。認識の仕方の違いと言ってもいい。

片や文章による表現は、連続する視覚世界のひとつひとつに言葉という名を与えることで切り分け、意味を持たせ、それらを白い紙に文字で書いて再現する。

一方で写真はカメラでもって世界と対峙し、フレーミングとタイミングで切り取ってきて、白い印画紙にプリントして再現する。その過程で言葉に変換する必要はない。言ってしまうえば言葉なんかなくなっちゃって世界はそこに存在する。

出会ったものを白い紙に再現する点では文章も写真もいっしょだ。けれど、言葉から離れるほうがいいという写真の在り方は、武田家で育ったぼくには新鮮でしかなかった。

しばらく腕組みをしてホワイトボードの文字を読んでいた美駒ちゃんが、ぼくに微笑みを向けて言った。

「文章の世界で育った礼央君は、わたしたちみたいな写真を撮っている人と、まったく反対側から世界を見ていたのかもしれないね。同じ世界を反対側から見ていた人だったんだね」

ぼくは美駒ちゃんの言い回しに感心した。世界の認識の仕方の違いを「同じ世界を反対側から見ていた」なんて。写真という言葉が介在しない表現に従事している彼女だけれど、Cは持ち合わせているのだ。

「もしくはこうも言えるかなあ。世界をどこまでも言葉で表していこうとする人と、どこまでも言葉から離れていこうとするけど世界の存在を示そうとする人」

なるほど、とぼくは大きくうなずいた。では、その臨界はどこなのだろう。

「ということはさ、わたしたちと同じ写真側に来た礼央君は、最初から写真しかやってこなかった⁽¹⁾わたしたちとは違う領域までたどり着けるかもよ」

〈どうだろうね〉

照れたぼくはそうとだけホワイトボードに書いた。

「わたしは期待しているよ、礼央君に」

期待という言葉にぼくの胸は高鳴った。父も母も妹も誰もぼくに期待などしてくれなかった。いつしかぼく自身も期待しなくなっていた。

「⁽²⁾あ、り、が、と、う」

心をこめて礼を言った。一音一音に心をこめて。

(関口 尚『サニー・シックスティーン・ルール』)

(注1) ヒロ チーム300のメンバー。

(注2) イチマルサン チーム300が作業部屋として借りているアパートの一〇三号室のこと。

(注3) 暗室作業 光を遮断した場所で、写真の現像などを行うこと。

(注4) 露光時間 フィルムや印画紙などに光を当てる時間。

(注5) ファインダー カメラののぞき窓。撮影範囲を決めたり、焦点を合わせたりするためのもの。

問一 傍線部①～④の本文中における意味として最も適切なものを、それぞれあとのア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

い。

① 没頭した

ア どんどん興味がわいて楽しんだ

イ 時間をかけて慎重に行った

ウ 困惑して苦しんだ

エ 他のことを気になけず熱中した

オ 追いつめられて必死になった

② 疎い

ア 思うところがあり、好ましく思っていない

イ 簡単に触れられず、憧れがある

ウ 不満を感じ、内容に否定的だ

エ 親しみがなく、知識が不十分だ

オ 関心があり、こっそり楽しんでいる

③ コントラスト

ア 融合

イ 対照

ウ 混在

エ 差異

オ 明度

④ 窺う

ア 相手と目を合わせる

イ 意見を求めて質問する

ウ そつと様子を見る

エ 機嫌をとろうとする

オ 優しく声をかける

問二 傍線部(ア)「ぼくは笑顔で首を振ってノーの意思を示した」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を使って、三十五字以

上四十五字以内で書きなさい。

問三 文中の空欄

A

、

B

 にあてはまる言葉の最も適切な組み合わせを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|------------|--------|
| ア A―にぎやかな | B―的外れな |
| イ A―あいまいな | B―月並みな |
| ウ A―おごそかな | B―大げさな |
| エ A―きらびやかな | B―上の空な |

問四 傍線部(b)「色は強い」とあるが、「ぼく」がこのように感じたのはなぜか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 被写体に驚くべき特徴や美しさがあっても、知らず知らずのうちに最初に色に注目し、被写体の姿かたちをとらえてしまっていることを自覚したから。
- イ ファインダーを覗く前に自分の目で見た被写体の自然な色鮮やかさによって、繊細な作りや特徴が際立って見えていたことに気づいたから。
- ウ 写真から色をなくして被写体の特徴を繊細にとらえることができても、その色ばかりが鮮やかに思い浮かんで、自分が色に魅力を感じていたのだと気づいたから。
- エ 強烈な色合いを持つ被写体では、その色が細かな構造や表情を覆い隠すような仕組みになっていて、すべてをとらえられないようにしていることに気づいたから。

問五 傍線部(ニ)「プリントの反省をしている」とあるが、そのときの「ぼく」の心情の説明として適切なものを、あとのア～オ

の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア どんなに色鮮やかな被写体であっても、色の違いのはっきりしないつまらない仕上がりにしかならないモノクロ写真を扱いづらく感じている。

イ 撮りたいと感じた被写体を魅力的な写真に仕上げるのは、被写体の強さではなく撮影者の使う機材の質だと気づいて、自分の予算不足を悩んでいる。

ウ 圧倒されるような被写体であっても、使用するフィルムによってはその印象を表出できないことを思い知り、写真の手ごわさを感じている。

エ 撮影中に仕上がりを確認できないというフィルムカメラの性質が原因で、貴重な被写体の姿を残せなかったことをもどかしく感じている。

オ プリントしたときの状態を考慮しなかった自分の甘さのせいで、被写体の確かな魅力を消失させてしまったことを不本意に感じている。

問六 傍線部(d)「写真はぼくが幼いころから教えこまれたことと、まったく逆で」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」が慣れている文章表現は出会いや主観で対象に意味を与えて再現するため存在を認識されないものもあるが、写真の場合は対象とともに対象の感情や雰囲気までもとらえるためすべての存在が認識されるということ。

イ 「ぼく」が日々学んだ表現は連続性と具体性を重視して多様な意味の言葉を重ねることで出会った世界を再現するが、写真の場合は瞬間だけを切り取って世界にある意味を取り除くことで再現しているということ。

ウ 「ぼく」が日々学んだ表現は言葉によって世界のひとつひとつを再現することで知識を積み重ねていくことが重要だが、写真の場合は言葉ではなく視覚でとらえて再現する経験を繰り返すことが大切であるということ。

エ 「ぼく」が慣れている表現は感知するものすべてを言葉によって意味づけることで細かく再現していくものだが、写真の場合は見たときの一瞬の刺激をとらえてありのまま再現する必要があるということ。

エ 「ぼく」が慣れている表現は感知するものすべてを言葉によって意味づけることで細かく再現していくものだが、写真の場合は見たときの一瞬の刺激をとらえてありのまま再現する必要があるということ。

問七 傍線部(e)「美駒ちゃんはつぶやいた」とあるが、このときの美駒ちゃんについての説明として最も適切なものを、あとの

の **ア** ～ **エ** の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」が写真に戸惑う理由に関心があったが、その説明がカメラマンには疑問が残るものだったため、気にかかる部分を思わず声に出している。

イ 最初は「ぼく」の話す内容がぼんやりとしていて困惑したが、説明を受けて少し理解が進み、重要だと感じた「ぼく」の言葉を取り上げてつぶやいている。

ウ 「ぼく」が写真に戸惑っていることに疑問を感じたが、幼いころの話を聞いて納得できたので、重要な言葉を繰り返して「ぼく」の心情に寄り添おうとしている。

エ 最初は「ぼく」の言いたいことがわからず不安だったが、幼いころの話があまりに意外で、特に気になった部分を思わず取り上げている。

問八 本文中の空欄 **C** にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとの **ア** ～ **エ** の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉で表現することへの自信

イ 言葉に対する繊細さ

ウ 言葉で心をいやす優しさ

エ 言葉に関わる意欲

問九 傍線部(f)「わたしたちとは違う領域までたどり着ける」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、あとのア

～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉で多様に世界を表現してきた「ぼく」なら、言葉から離れることなく写真によってさまざまな世界を具体的に示すことができるかもしれないということ。

イ 言葉から離れることの難しさを経験している「ぼく」は、そうした感情によって世界を表現することで、これまでにな
い新鮮な写真を生み出せるかもしれないということ。

ウ 言葉で世界をとらえてきた「ぼく」なら、その感覚を写真による表現と融合させ、世界を新しいとらえ方で示すことが
できるかもしれないということ。

エ 言葉で表現することで育ってきた「ぼく」が、写真を通して異なる世界を経験すれば、文章表現がこれまでにない深い
ものになるかもしれないということ。

問十 傍線部(Ⓔ)「あ、り、が、と、う」とあるが、ここに至るまでの「ぼく」の心情の説明として最も適切なものを、あとのア

～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好意的な言葉を聞いて照れくさく思いつつも、美駒ちゃんが「ぼく」に期待を寄せてくれたことに心が弾んだが、身近な人たちから見放されている自分の現状を思い、美駒ちゃんの期待に応えて結果を出したいと感じるようになっていく。

イ 好意的な言葉を少し重荷に感じたが、美駒ちゃんが「ぼく」に期待を示してくれたことで、自分が表現する意義を感じられて心が軽くなり、自分を卑下して美駒ちゃんの思いに真面目に向き合わなかったことを反省するようになっていく。

ウ 実力以上に評価されて落ち着かない気持ちになっていたが、さらに美駒ちゃんが「ぼく」に期待を示してくれたため緊張しながらも今までにないほど写真に対する意欲が高まり、美駒ちゃんを特別な存在だと感じるようになっていく。

エ これまでの経験を過大に評価されてきまりが悪くなっていたが、美駒ちゃんが「ぼく」に期待を寄せてくれたことで、久しぶりに自分の存在が認められて救われたように感じ、素直に美駒ちゃんの思いを受け入れられるようになっていく。

問十一 本文での表現や内容の説明として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぱつと明かりが灯ったように感じられる」という比喻によって登場人物の雰囲気や登場人物同士の関係性を示すと同時に、暗室とホワイトボードという明暗の背景の描写によって二人の登場人物の異なる状況や立場を暗示している。

イ 「せつせと」「うんうんと」のような擬態語、擬声語によって登場人物の真面目さや相手に対する優しさが表現されているのと同時に、「首を傾げた」「腕組みをして」など細かに様子の描写を重ねて心情が感じ取れるようにしている。

ウ 色の強さに関する登場人物の考えを描写する場面では第三者の視点による客観的表現を多用して印象を強めるのと同時に、文章最後の一文を省略するような形で終わることで物語の展開や登場人物の心情に余韻を与えている。

エ 主人公の視点を中心に描写しながら別の登場人物の視点を部分的に挿入することで主人公の態度や様子も客観的にとらえると同時に、筆談を含む会話文によって主人公の過去や考え方を掘り下げて、描写に深みを与えている。